

熊本城 復興に向けて

〈16〉本丸御殿の発掘調査

平成28年熊本地震前の本市では、平成9年度に策定された「熊本城復元整備計画」によって、熊本城復元整備が進められていました。整備は短期・中期・長期に分けられ、短期計画の最後として築城400年にあたる平成19年に本丸御殿の主要建物の復元と遺構の表面表示を行うこととなりました。復元のための遺構確認*と保護を目的として、発掘調査を平成11年5月から平成18年まで行いました。

熊本城の本丸御殿は、慶長15年(1610)頃に完成し、寛永年間に細川忠利により一部改修されたと考えられています。江戸時代中期の『御城内御絵図』には、藩主の居間や対面所となる広間、台所などさまざまな機能を持つ建物が描かれています。大広間と大台所の「くらがり」と記された部分に地下通路と玄関を備えた全国的にも特異な構造の御殿でした。以前は部屋数が53の壮大な御殿であったと言われていますが、明治10年(1877)の西南戦争の際に起きた火災によって、天守とともに焼け落ちました。発掘調査は、『御城内御絵図』に描かれた御殿の配置や部屋割りを参考にし、建造物を復元する大広間・大台所棟と数寄屋棟などの付属棟を中心に行いました。

発掘調査の結果、火災の後、ほとんど片付けが行われなかったことがわかりました。明治10年2月19日の火災後の状態がそのまま残っていたのです。発掘調査では火災の焼土を取り除き、焼失時の建物の状態を確認しました。焼土の中からは、焼けた部材や膨大な量の瓦や金具が出土しています。礎石や石垣を含め、いずれも高熱を受けて溶けたり破損しており、火災のすさまじさがうかがわれます。

本丸御殿と言えば豪華な飾りや調度品の印象が強いのですが、発掘調査の結果からは本丸御殿にふさわしいものはほとんど出



▲発掘調査の航空写真

土していません。わずかに柱の飾り金具や衾の金具などに装飾がみられる程度でした。当時の本丸御殿は、熊本鎮台本営として軍が使っていたので、軍用品が多く出土しています。大広間や小姓部屋では、ボタンや徽章(帽子の飾)などがそれぞれまとまった状態で大量に出土しましたので、物置として利用されていたのかもしれませんが。大広間では硯や水滴も多く出土しており、書類を作る空間としても利用されていたようです。

出土品で注目されるのは、小広間三階櫓付近から出土した一群です。この付近からは「熊本鎮台本営之印」、拳銃、時計など、高い階級の軍人でないと持ち得ないものが集中して出土しました。本丸御殿の南西端で見晴らしのよい小広間三階櫓を鎮台の幹部が使用していたのかもしれませんが。

建物の部材も大量に出土し、特に「くらがり」と呼ばれた地下通路は、落下した大広間の部材で足の踏み場がありませんでした。焼けた部材からは、使われていた木の種類、柱の大きさがわかります。また、礎石の配置から部屋の間取りや柱間がわかります。この調査成果と絵図・古写真を元に建物の復元設計を行い、幕末期の本丸御殿大広間・大台所・数寄屋の建物を再現しました。

* 遺構確認…古い建築跡の状況を調べること。

(熊本城調査研究センター 金田 一精)